佛教ぎふ

発行　昭和58年1月1日
岐阜県仏教会事務局
岐阜市西野町3丁目1番地
岐阜西別院内 TEL(66)7803
編集　出版委員会
1部送料共　80円

仏教の奥義を書に
名僧名刹墨跡展

仏教の奥義を書に託した「名僧名刹墨跡展」が県仏教会・岐阜日日新聞社・岐阜放送主催、県檀信徒会後援で昨年十月七日から十二日までの一週間岐阜高島屋十階催場で開催された全国の仏教各宗派の高僧、名僧ら約七十人の軸や色紙百二十点が展示され、「眺めていると心が洗われる」といった感想も聞かれて初日から最終日まで連日熱心なファンが詰めかけ大にぎわいであった。

初日は午前九時四十五分から会場入り口で開場式が行われ、東雲（しののめ）文洋同展実行委員長の開会のことばについで、主催者として杉山幹夫岐阜日日新聞社・岐阜放送社長が「物質万能から心の問題に目がそそがれて来ている。アイ・ラブ・ギフ運動もその一環として本社が提唱してきた。この墨跡展を一人でも多くの人に見てもらい、仏教の心にふれていただきたい」と、また加納博司県仏教会会長は「県仏教会は十六年間、お経を習いましょう運動を続け、青少年の教化を進めてきた。今回の墨跡展は京都、東京の管長、門主などの協力を願って出品できた。期間中盛況であるように」とあいさつした。

ついで杉山令肇県仏教会顧問、谷耕月県仏教会名誉会長、高橋順吉県檀信徒会名誉会長、橘感月全日本仏教会理事がそれぞれ祝辞を述べたあと杉山令肇、谷耕月、高橋順吉、杉山幹夫、若染一雄県檀信徒会会長の五氏がテープカットをし、会場につめかけていた関係者が一斉に拍手を送ってオープンを祝った。

同展は青少年の育成教化活動の一環として、全国の仏教各宗派の高僧名僧の墨跡と、引用されている仏教精神をくみ取ってもらおうという、県下で初めての催し。全日本仏教会会長金子日威、妙心寺派管長松山万密、永平寺貫首秦慧玉、薬師寺管長高田好胤、西本願寺前門主大谷光照各師らの「慈眼視衆生」「吾心似秋月」「自然法爾」「行雲流水」「如妙鏡」など仏典や禅語から引用されたり、高僧名僧の心境や悟りを表したものなどが多数展示即売され、連日お年寄りや夫婦連れらが詰めかけ、名僧たちの作品をじっくりと鑑賞。一点一点を手帳に書き写したり、カメラにおさめる熱心な人も。又どの入場者も会場を出るとロ々に「どの作品も素晴らしく心が清浄になり、人生のあり方を考えさせられる」と感激していた。

「般若心経」讃

小倉宗徳

古くから世に知られ、読まれている経に般若心経がある。般若心経は仏教の智慧を代表する経典の一ッであり、本文わずか二百六十二文字の中に、仏教が教える深い智慧を説いた経として知られている。

この般若心経について、出来る限り専門的な言葉を使わず、般若心経の大意を、達意的にお話をしたい。つまり、般若心経を心の経として、心の教えとして理解してみたいのである。すこし長いが、全文を紹介する。

形あるものは
すべてこわれてゆく
花のように
人のように
楼閣のように
されど
形なきものは
虚空のように
大空のように
いつまでも
こわれることを知らない
形あるすべてを捨てた心
かわりゆくすべてを
離れた心
それが空の心である
みどりの大空のように
空の心は限りもなく
涯もなく
増えることもなく
減ることもない
こわれゆく
この世のすべてを
離れるが故に
生きることにも迷わず
躓づくことにも惑わず
ただすべての畏れを離れる
若葉にしたたる日の滴が
すべてを包み
すべてを育くむように
空の心は
何ものをも許し
何ものをも育てゆく
これは限りなき光であり
楽しみであり
無我のさやけさである
ほがらかなる空の心よ

あたたかく滴る空の光よ

これは私の学生時代の恩師、哲学者小笠原秀実氏の「般若心経意」と題された一文の詩であり、頌である。

私は、これを折にふれ、悲しいとき、苦しいとき、悩み、惑う日々に、喜怒哀楽の朝夕に、大いなる智慧の、心の経として、心の教えとして、幾たびも読みかえす、まさに、私にとっての心の経であり、心の支えであり、生涯の指針ともいうべき大切な「般若心経意」であり、また、心に深くしみる詩でもある。

人生は、まことにさびしいし、悩みが多い。人それぞれの心の支え、魂の支えを、さがし求めて生きているのが世の姿であろうと思うのである。

―後略―

岐阜放送ラジオ「岐阜県仏教徒の時間」六月二十日放送より。

中国で日米微笑外交

中国西安空港、満員の待合室で席をゆづってくれた米国婦人の厚意に対して家内とカタコトのお喋べりが始った。例によって米国の何処ですかと云った調子である。サンフランシスコの近くのサリナスよ。エッ、サリナスの仏教舎を訪ねたねと私に向って言う。にこやかに立っている丈の高い主人は夫人に催促されて私に名刺を差し出した。見ると一面に色刷りでキープ・スマイリングと大文字。裏もまた一面カレンダーで最下段に小文字で住所氏名電話番号が刷りこんであるばかり。医師でポーターを同伴してのゆたかな旅行者。

私も名刺の裏に筆ペンで"口許に微笑みを"と書いて、キープ・スマイリングだと言って差出したら、オッー、とうれしそうにわが同志だと云わんばかり夫婦が顔見合わしてから大きく両手をひろげてそして固い握手、機内に入ってから筆ペンと中国陶器の香水容器のプレゼント交換が行われ、お互いニコニコ、日米両婦人の機内往復が他の乗客にも微笑をもたらしたことだった。

―橘―

岐阜県出身の浄土宗門主藤井大僧正晋山

大本山増上寺法主藤井実應大僧正は浄土宗一宗の推挙により才五代浄土宗門主、京都知恩院才八十五世門跡となられ、その晋山式が昨十一月五日、秋雨のそぼ降る中、古式に則り盛大に挙行された。門主の挨拶の中で、法然上人御誕生八百五十年のこのおめでたい年に、八十歳をすぎた（注八十五才）私が一宗の推挙をうけて門主となり知恩院才八十五世の門跡をつぐことについて、ことに身のひきしまる思いがいたします。この上は祖訓にしたがい不惜身命の決意をもってその任を遂行したいとのべられた折には、聞いているこちらも身のひきしまる思いであった。

―橘感月―

藤井門主と筆者

アジアの仏教国の子どもたちにきれいな〝水〟を贈りましょう

―全日本仏教青年会―

久松真一先生遺墨展

三月二十三日より五日間県美術館で

岐阜県が生んだ世界的宗教哲学者久松真一先生が不死の死を現成されてから早や三ヶ年になる。先生は孤高な哲学者であると同時にポスト、モダニストとして最後まで信念に徹せられた宗教者であった。遺偈の一ツに、

我死すも引導追薦葬無用
むくろは茶毘て　骨なひろひそ

と、死んでも連絡するな、葬式もいらない、骨もひろうな、墓碑もいらない、肉体の自己は本当の自己ではない、自分は死んでも死なない、といって居られた。が、「高齢だから、いつ亡くなるかわからない、死後はあなたの中の私と対話して下さい」とも言って居られた。近かよりにくい一面と慈しみぶかい一面とを併せもって居られたから、月日がたつにつれて、心の中で対話していられた方々が相寄つて、先生の遺墨に対面したいこころもちが集成されて豪華上製本「墨海久松真一の書」京都灯影舎刊、定価三万五千円、が出版された。そして昨年四月二十九日京都会館で出版記念講演会と遺墨展が催された。このたび初めて岐阜県美術館で院展が開かれる好機に同会場で先生の素晴らしい墨跡に対面出来ることは何よりのことである。尚、記念講演が予定されている。

旋風打

▼「結界」というのは、仏教で僧侶と教団の秩序を保持するために一定の地域を限るのがもとの意味とされる。

▼そこから密教では修法を行なう場所に魔障が入らないように、比叡山や高野山が「結界地」とされ、特に女人禁制の地ともされてきたのである。

▼また寺院内の内陣・外陣の間の木柵なども結界とされた。

▼それは出世間と世間・聖と俗を分つ境でもある。

▼結界は一つの秩序・けじめであって、それを破ろうとすればいくらでも破ることができる。とりきめなのである。

▼そういう結界の思想は、たとえば、日常世界からそこに入る茶室の「にじり口」に生かされ、また商家の「のれん」や「お張場格子」などの生活の中にも入ってきているという。

▼「なりふりかまわない」ということもあるけれど、庶民の生活の中にも、こうした秩序が大切にされてきたのである。

▼日本の昔からの家の建て方配置にも一定の秩序があった。座敷・床の間・仏間台所などがそれであり、その配置もきまっていた。

▼台所では主人や嫁のそれぞれの座もきまっていた。それが今日では殆んど失われてしまってきている。

▼それが今日では見失われると共に、「かたち」と共に生活が無秩序となってきてはいないだろうか。

▼いたずらに格式ぶることはないが、方位・方角や迷信にこだわるよ　も、そうした秩序を今一度思いかえしてみたい。

▼京都市では拝観料による文化観光税をとるかとらないかが問題になっているが、仏教が生きている、本当の秩序としての「結界」を現代の社会に活かせてほしいものである。

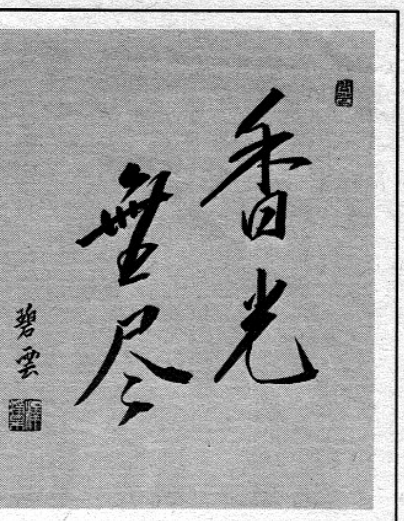
（藤田）

あたらしく
毎日を生きる

真宗大谷派
岐阜別院
輪番　堀内　静
岐阜市大門町
電　岐阜　六二―一三八〇

浄土真宗本願寺派
岐阜別院
輪番　篠原　喬雄
岐阜市西野町
電　岐阜　六二―〇二三一

臨済宗妙心寺派
瑞龍寺
清田保南
岐阜市寺町
電　岐阜　四六―二五九七



大谷大学学長　広瀬杲
「香光無尽」

こうごうしい光は尽きることなくこの世を照らしている。光とは仏の慈悲であり、人はそれによって生かされている。光の尽きない妙味である。

中国仏教遺跡の復興
中日邦交正常化10周年に際して

橘感月

昨秋、中国へ浄土三祖の遺跡巡拝に出かけた。大阪、上海、北京と三段跳びでやってきたせいか、宏壮な友誼賓館に入っても、中国へ来た実感が湧かない。

千何百年に及ぶ友交深い隣国というよりか、日本にとっては先師の国だった中国へ侵略をかけ、昭和六年以来、千余万の犠牲と五千余万人の難民を出しながらも勝者として日本を占領することも賠償権をも放棄した寛容な国、文化大革命だといい、古きものは切り捨てろと極限までやってのけた国。

その中国と友交正常化の途が開かれて十周年を迎えたこの年に初めて来たのである。

正常化といってもまだ六年前までは仏教遺跡への立入りは許されていなかったが、鑑真和上像の里還へりから三年前善導大師千三百年法要を現地で勤修するために資財を運び勤労奉仕までした浄土宗の壮挙に刺激されてか、にわかに、日中仏教の交流がさかんになった。現に私共がやってきたこの同時期に米寿を迎えられた山田天台座主が百余僧をひきつれて五台山で修練し人民大舎堂で日中仏教の交歓を、西安市博物院では藤井浄土門主寺の日中墨跡展を、高田薬師寺管主等は慈恩大師千三百年法要を西安の呉教寺で行うなどめざましいかぎりである。それぞれの仏教寺院で復興と参道の造成拡張などが際立って見られる。短時日に十数ヶ寺巡拝という管見だから、何とも言えないが、日本仏教徒の巡拝に刺激され、それに乗じての観光目的、外貨獲得のためばかりでないようにもうかがえる。殿舎の復興、仏像の荘厳だけにとどまって観光寺院と堕することなく、本来の仏教信仰の活性化が望まれる。自転車の普及化はめざましいものがあるがこれは農民、市民の生活が活性化してきた現象でもあろう。この際、偉大なる仏教遺跡の復興に手助けするばかりでなく、仏教信仰の活性化によって、中国人民の生活が正常化されることに協力することが、日本仏教徒のせめてもの、先師の国であった中国への恩返えしになるのではなかろうかなどと胸ときめかして巡拝してきたことであった。

古都西安のシンボルとして、玄奘三蔵によって経蔵として創建されて以来千三百年の風雪にたえて今日も天空に聳え立っている。―大雁塔―

歴史のコーナー（その4）
美濃の浄土宗

美濃の浄土宗を語るには智通能化（字は光居）、この人の功績を先ず才一に挙げるべきである。当時は智通菩薩とも言われた高僧で後に北朝の後光厳天皇には大垣で拝謁されている。この人は島根県に生まれ後、京都において西山善慧上人五代末の法孫として専修念仏者としての名声は高く、文和二年（一五五二）伊勢参宮の途中、市橋村西の荘に巡釈し西向念仏する事七日間におよび、近隣の民衆の深き崇敬と領主小野種壺、石川義燕の深く帰依するところとなり、たま〳〵両氏の境界線が粉争の基となる所からその土地の寄進を受け堂宇を建立し開山となって多くの人の崇拝を得た。以上が亀甲山立政寺創建の大要である。その後立政寺は寺領の拡大と堂塔の建築によって浄土宗西山派中部地方中本山として美濃各地に四十数ヶ寺の末寺を創建し、浄土宗の確固たる地盤を確立した。その布教の中で面白い伝説を紹介すると、西の荘立政寺境内に今尚、鳴かずの池と云うのが現存する。一説によるとこの池の蛙は鳴かずの蛙とも云い、嘗っては夜な夜な騒がしく鳴く為に智通上人はたまりかねて山県郡谷合村に隠棲されました。その為或る一夜上人の夢の中で一人の老婆が現れ『私は西の荘の蛙の化身であるが今後一切鳴かないので是非帰って来て下さい』と伝えたと、それ以後この池の蛙は鳴かなくなったと伝承するが、これは裏話で史実としては山県郡の避地にこの地の有力者臼井氏の招請により文和五年（一三五五）善導寺を創建し開山となっている。因みに善導寺は隠住山と号し池中より石像の善導大師像を発掘出現した霊地である。

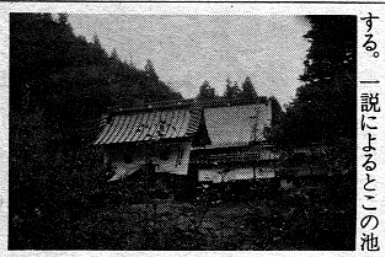
立政寺はその後、十代目護海上人の寛正元年（一四六〇）に勅願所となっている事から美濃の浄土宗は西山派が大きく躍進したが、後年江戸時代となり徳川氏、松平氏の庇護によって大きく飛躍した鎮西派（知恩院）の進出によってその分布も大きく変って来た。

浄土宗の開祖は法然上人である。浄土信仰については古くから研究されていたが、現実に念仏信仰を説いたのは源空法然で諡名を圓光大師と申し上げる

法然上人は仏教の道を聖道門と浄土門に分類し、聖道門は自力難行であるとし浄土門は他力易行として自らは易行により念仏信仰を選び、有名な選釈本願念仏集の著作は建久九年（一一九八）六十五才の事であった。折しも鎌倉では源頼朝が相模川の橋供養にのぞみ落馬した年でその翌年歿している。又禅宗の栄西禅師は興禅護国論を著作した年でもある。

京都では法然の説く専修念仏に叡山を軸とする既成仏教圧迫は厳しく、遂いに建永元年（一二〇六）には弟子の安楽は六条河原で同じく住蓮は近江で斬罪に処せられて、建永二年には僧籍を剝奪されて土佐に流された。時を同じくして若き親鸞は越後に流罪となった。しかし法然はその翌年大赦によって赦免されたが京都に帰る事は許されず、摂津の勝尾寺に寄寓し建暦元年（一二一一）の年の暮に都に帰る事を許され、その翌年東山大谷の禅房にて八十才の生涯を終えた。

しかもその十四年後の安貞元年（一二二七）には山門の衆徒によって墓所をあばかれる等、歿後も遺体の置き場所にも事欠く状態で実に法然は受難の生涯であった。その遺骸はひそかに門弟達によって茶毘に付され嵯峨の二尊院に安置された。それから七年後の文暦元年（一二三四）法然の弟子勢観房源智（紫野派始祖）によって再び分骨され、東山の現知恩院廟所に移し御影堂を建立したのが知恩院創建の始まりである。後に鎮西義の始祖聖光が源智と法談し完全に両者の意見が一致し、鎮西派は次第に紫野派を吸収しやがては源智上人は知恩院の二代目となり、鎮西上人は三代目となって基礎は出来て行く。



善導寺

「岐阜県仏教徒の時間」出演者
（敬称略）

4・4・11谷耕月・杉山令肇。18橋感月・25加納博司。
5・2篠原喬雄。9谷哲成。16高田信雄。23辻唯円。30岩成恵雲。
6・6鬼頭潮浄。13箕浦望人。20小倉宗徳。27小島秀賢。
7・11若染一雄。18臼井重清。35森和久
8・1岐阜教育大学コーラス部。8牧田諦亮。15河出保長。22近藤諦観。29堀義雄。
9・5横山公一。12菊地大英。26東雲文洋。
10・3馬場宗信。17蓮寺諦成。24桑海純道。31玉腰了寿。
11・7林憲昌。14井口要堂。21河合了雄。28高橋胆勇。
12春日文英。若園潮純。泉義尚。辻良雄。大野法堂。

県内各地のうごき

○岐阜市仏教会
七月九日　岐阜市戦災記念万霊塔法要　后二時、上加納山にて。
九月五日　白山校下研修旅行一三五名参加、多治見市永保寺、瀬戸市定光寺参拝長野県馬籠宿見学。
十一月三日　白山校下追弔法要、物故者五十名　於白山小公民館にて。
九月十七日　三里校下役員会、后六時半、慶善寺。
九月二十一日　秋季万霊塔法要后三時、上加納山にて。
九月二十五日　三輪藍川校下檀信徒大会、於延算寺。
十一月五日　加納東仏教会檀信徒会では同専福寺において会員物故者追悼会。
○七宗町仏教会
九月十五日午前九時より午後一時まで仏教会並檀信徒説会　示現寺にて、当日の講師県仏教会長加納博司師
○東濃仏教徒大会
十一月九日　多治見市の名刹虎渓山永保寺に於て開催の「第十三回東濃仏教徒大会」が会員約百五十名の参加を見た。本尊上供、物故者追悼法要のあと、多治見仏教会長及び県仏教会長のあいさつがあり、午後は永保寺香南老大師が「仏教徒としての自覚」と題して法話され、ユーモアを含んだわかりやすい語りかけで聴衆を釘づけにした。

本巣郡仏教会秋の研修
○九月二十八日　美濃町の清桑寺、関の新長谷寺、伊深の正眼寺を巡拝し、和紙の文化財保持者古田行三氏宅を見学、参加者四十五名
○十月十六日　北方の円境寺を会場にして水野税理士を招いて税務の研修をした。参加者院四十余ヶ寺。
○十月二十五、六日　幹部研修として五ヶ山の秘境を訪ね行徳寺、明善寺を巡拝し当日は快晴ながら奥飛騨は初雪にてスーパー林道は閉鎖され紅葉探勝は出来なかったが、両寺の大いろりで暖をとったことは思い出ふかい。ひるがの高原のりんどう荘で一夜をすごした。

みんなで聞きましょう
岐阜県仏教徒の時間
毎週日曜日午前7時35分～7時50分
GBS岐阜放送ラジオ
岐　阜　1,431KHZ　高　山　720KHZ
多治見　1,431KHZ　萩　原　1,197KHZ
恵　那　1,485KHZ

医療法人
聖病院
院長　竹腰昭道
成人病専門
高血圧・神経痛
糖尿病・心臓病
脳血管障害・癌
胃・十二指腸潰瘍
肝臓病など
岐阜市加納新本町3丁目10番地
TEL　岐阜（0582）71－5533㈹

学校法人　聖徳学園
理事長　杉山令肇
聖徳学園本部　岐阜市中鶉一丁目五〇番地☎〈〇五八二〉七二―四一五四
聖徳学園　岐阜教育大学　岐阜県羽島郡柳津町高桑☎〈〇五八二〉七九―〇八〇四
聖徳学園　岐阜教育大学付属高等学校　岐阜県羽島郡柳津町高桑☎〈〇五八二〉七九―〇八〇八
聖徳学園　岐阜教育大学付属中学校　岐阜県羽島郡柳津町高桑☎〈〇五八二〉七九―〇八〇八
聖徳学園　岐阜教育大学付属小学校　岐阜県羽島郡柳津町高桑☎〈〇五八二〉七九―〇八〇五
聖徳学園女子短期大学　岐阜市中鶉一丁目三八番地☎〈〇五八二〉七二―四一五一
岐阜南高等学校　岐阜市中鶉一丁目五〇番地☎〈〇五八二〉七二―五四五一
聖徳自動車学園　岐阜県羽島郡柳津町東瀬外☎〈〇五八三八〉七―四一七一